

所謂「成吉思汗碑石」に對する諸研究に就いて

——クリューキンの論文の翻譯紹介を中心として——

愛 宕 松 男

一、は し が き

元朝中期の文献と稱する“Jirüken-ü tola yin tayir iburi”乃至之に依據せる蒙古・西藏史料を基として、蒙古族の間に於る文字の歴史を一二四七—一二五一年の間に於てラマ僧 Sa-skya Pandita に始まるとする見解は今日なほ絶無ではないけれども、而も其が謬見たる事は論を俟たない。十三世紀中葉、蒙古人の畏吾兒字採用を言ふカルピニ、ルブルツキーの記録は年代的に此問題解決に資し得ないとするも、太宗脫列哥那皇后監國四年の日附を持つ山東朝城縣「興國寺舍利塔令旨碑」(山左金石志 卷二十一)或は太宗七年の令旨を刻す陝西鄠縣「重修草堂寺碑」(錢大昕金石文 跋尾 卷十八)には已に蒙古字(畏吾兒字)使用の事實が傳へられて居る。就中、一九二

〇年バチカン古文書中に於てペリオ等の發見に係る法王インノセント四世宛グク汗の書翰——之は波斯文で書かれ一二四六年の日附を持つてゐる——には、現に六行よりなる蒙古語畏吾兒字の印璽が認められて居るのである。蒙古字の歴史が更に其起源を過去に求める可きは明かである。されば成吉思汗の畏吾兒字採用を一二〇四年乃蠻征伐中の一挿話として記載する元史塔塔統阿傳は、此の點當時の情勢と併せ考へて容認さる可きであらう。少くとも、漠北を一丸とする統一的部族制國家の成立が西方ウイグル文化圏との間に開始しはじめた統制的、秩序的な直接交渉と呼應して、或は内面的要求として或は客觀的必然性に於て、畏吾兒文字採用を當時に實現せしめた事のみは之を承認せねばならない。國初蒙古王族の師傳として登用された

畏吾兒人哈刺赤哈赤北魯・岳璘帖穆爾・庫爾吉司等の
事績は此の斷定を裏づけるものである。

現存する古代ウイグル蒙古文字の文献は其數甚しくは
尠しとせない。諸汗國の貨幣を除外するも、イル汗
アルゴン、ウルジャイツーよりフランス王フィリップ四
世宛の一二八九年・一三〇五年附書翰(パリ國立古文書
書收藏所所藏)、
一八四八年ドニエプル河畔出土、金帳汗國アブヅラー
汗(三六二)の銀牌(レニングラー
ド學士院所藏)、元統三年(三五)至
元四年(三八)の張應瑞・竹溫台の碑、一三四五年の居
庸關の碑、一三九三年、金帳汗國トフタミシ汗の詔勅
の如き其の代表的なものでたり得るであらう。唯それ上
記畏吾兒字採用の當初に近き漠北時代に屬するものに
至つては、著しく其數を局限せられ、纔に上掲一二四
六年のグク汗の印璽及び其自身明確なるデートを缺
くも而も成吉思汗の晩年、少くとも現存せる最古の蒙
古字文献として諸説一致する所謂「成吉思汗碑文」の
二つを數へるに過ぎない。されば本紀念碑の有す重要
性は單に其が蒙古語の最古の雛型であり又蒙古人の殘
せる最古の文献たる點に於てのみならず、更に蒙古帝
國初期の文化現象に直接間接關與を有する點に認めら

れねばならない。然るにも不拘、本碑文の解讀は年月
による碑面の磨滅破損其他の惡條件に災せられて、決
定的な解決をなほ將來に残すの現狀に止まつて居る。
嘗て新しく提出は認された解釋にして次で反對否認せ
られ、或は前に一度は反駁せられながらも再び支持贊
同せられた見解も少くはない。されば一應こゝに從來
の論說の經過を通觀し其結果を整理して以て今後の研
究の完成を待ちたい。

尤も本紀念碑に對する研究と云つても學術的主題的
に之を取扱つた限り、シュミット「蒙古人統治時代の最
古の一碑文に就いて」(I. J. Schmidt : Bericht über
eine Inschrift aus der ältesten Zeit der Mongolen-
Herrschaft. "Mémoires de l'Académie des Sciences
de St.-Petersburg". 3e serie. vol. I. 1834) に始まり
バンザロフ「成吉思汗の甥イシンケ大公碑の蒙古碑文
の解釋」(D. Banzarov : Obyasnenie mongol'skoi nad-
pisi na pamjatnikui knyaza Isunke, plenyannika
Čingis-Hana. "Čornaya vera". SPb, 1891) ヲリ
ーキン「ハルヒラ石(成吉思汗石)に刻せる最古の蒙
古碑銘」(I. A. Kiükün : Drevnejšaya mongol'skaya

nadpis' na Harhira'skom (Čingis-hanovom) kamne.
 "Trudni gosdarstvennogo dal'nevostočnogo Univer-
 siteta". seriya W. No 5, 1927) に終る三篇を數へ
 るに止まる。而もシニミットの研究は寧ろ單なる翻譯
 とも稱す可きものに過ぎず、バンザロフの論文又近時
 播磨橋吉氏の翻譯(善隣協會調査月報、七九)を得て從來の如き參
 照の困難より解除さるゝに至つた。是れ本篇が「成吉
 思汗碑石」の諸研究の展望を題しつゝ、勢ひ専らクリ
 ューキンの論文の紹介翻譯に終始するに至つた所以で
 ある。

二、碑石と碑文

所謂「成吉思汗碑石」と稱せらるゝ紀念碑が學界に
 紹介せられたのは一八一八年に始まる。シベリア研究
 家スパスキー Spasky は同年「西比利亞通報」Sibirskij
 Vestnik 誌第四篇に次の如き報告を爲して居る。

「アルグン河 Argun 左岸に注入する一支流、ウルリ
 トング河 Urlung の北方には花崗岩質の山々が一
 面の森林に覆はれて居る。然るに此等高地より「南
 方」半日行程、支那との國境地帯に至れば廣濶なス

テツプが展開する。

此山地に發源しウルリユング河に向つて流れる數條
 の小川は孰れも途中、流砂の間に消失して一もウル
 リユング河に達しない。此等諸川の中、クイルクイ
 ル川 Kuirkuir 及びマラーヤ・コンジーヤ川 Malaya
 Kondurya の沿岸には前代の住民の建造にかゝる若干
 の建物の遺跡が存したが、其等は已に大分以前に發
 掘せられ、唯クイルクイル川沿岸の遺跡のみがなほ
 未調査のまゝに残されて居る。併し余が入手した見
 取圖に依れば、此等遺跡は互に九十サゼン(約二
 百メートル)の間隔に在る事が推知せられる。遺跡
 中の土壘・土堤の或物は様々な又奇異な方向を具へ
 て居るが、併し其の四角形の外觀よりすれば其等は
 柵の土臺であつた事が偲ばれる。

クイルクイル川の上流、此等の遺跡より五露里の地
 點に若干の古墳群が存在する。一部の人々の確言す
 る所に依れば、東洋文字の碑文を刻した巨大な花崗
 岩碑石が存したのは此の古墳群の側であつたと。併
 し他面、之に對して大部分の人々は本碑石はコンジ
 ー川沿岸の遺跡發掘の際に發見せられた諸紀念碑の

一であると主張する。」

其後ロシア帝室學士院會員シュミットは一八三三年三月二十二日アカデミーの公開講演に於て、右スバスキーの紹介並に當時親しく現地に赴いた學士院書記シリング・フラン・カンシュタート Schilling von Canstadt の報告に基き、本碑石發見の事情を大約左の如く發表した。

「支那との國境に近きウルリュング河の一支流、マラーヤ・コンゾーヤ川—現今蒙古人・ツングース人は之を Chondai 川と稱して居る—の畔に廢墟が在る事は以前より知られて居た。嘗て、此地より四露里のコンズーイスカーヤ村 Sloboda Konduskaja の住民が何か利得を當にして、之が發掘に従事した事があつた。彼等は終に廢墟を覆つて居た灌木・芝草の下から長さ四十三尋 Faden・巾二十三尋の建物の遺跡を掘り出した。建物の内部には龍其他怪獸を彫んだ花崗岩の石塊—此等は併し支那風なものではなかつた—其他花崗岩の切石等が包藏されて居た。此等出土品は其後村民の手により悉く一寺廟建立の材料に使用せられたが、僅に怪獸の形をした石塊一個と

此處に問題とせる蒙古文字を刻した碑石のみは、幸にも難を免れてネルチンスク市に移送せられた。」

要するにコンズーイスカーヤ村民の手によりマラーヤ・コンゾーヤ河畔に發見せられた本紀念碑は、其後一旦ネルチンスクに移されたが程なくスバスキーの努力に依つて一八二九年當時の首都ベテルブルグに移管せらるゝに至つた。現今レーニングラードのアジア博物館正面の壁間を飾れる碑石は乃ち是である。因に該地の詳細なる地形圖はクズニェツツフ「コンズーイスカーヤ村及び其附近に於る廢址」(A. K. Kuznetsov : Razvalini konduskago garodka i ego okrestnosti, Vladivostok, 1925) に掲載せられて居る。

碑石は、昭和五年九月親しくレーニングラードに在て調査せられた本學助教梅原末治氏の言によれば、面の粗なる花崗岩切石であつて、頂部は不均齊な孤狀を爲し下部に方形の要石(基石)を有すると。左に掲ぐるものは同助教教授を煩はして得た實測圖である。

碑石面には五行より成る碑文が刻まれて居る。第一行の極めて短い行は表題として他の四行より高く、蒙古人大帝成吉思汗の名前を記す。同様に第四行も又前

の兩行・後の一行よりは高く而も第一行よりは低く頭書され、本碑文の主人公たる成吉思汗の甥諸王也松格の名前に始まる。最後の行は半行に過ぎない。全五行を通じ二十の用語（バンザロフ、シュミットは二十一語）、他に接尾語六、句讀點二が使用されて居る。

碑石は周知の如く、ネルチンスクに運搬の途上破損を蒙り上下の二部に切斷せられた。碑石面を左側中央部より斜に右下に走る直線狀の割目は此結果生じたものである。此龜裂に關

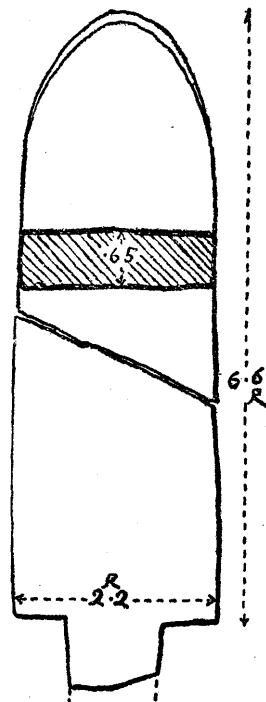
しシュミットは「幸に碑文には何等の損傷をも與へて居ない」として居るが、事實は決して左様ではない。碑文

の第二行第三語は爲に其の語頭の字母を失ひ、第三行第二語も又語中に於て若干字母を湮滅せしめられて居る。此等の破損、就中第三行第二語の其は、之を *boqa orai*「凡ゆる不和」*Buqa Sūngai* と二語に判讀せしシュミット、バンザロフに對し、新に之を *boqoročigai*「競技の相手」の一語とするクリューキンの見解を提

出せしむる餘地をすら與へたのである。而も問題は單に一語の解釋の相異のみに止る可き性質のものではない。シュミット以下全然意味を異にする三様の翻譯が多かれ少なかれ其原因を之に發して居る事は否めない事實である。

三、碑石の名稱

キヤフタ市 *Kyafra* の蒙古語教師ブリヤート人ワン
チコフ *Vantikov* が



本碑銘に最初の翻譯を施したる際第一行に銘記さるゝ蒙古人大帝 *Cinggis Khan* の名前に因んで之れ

に賦與した「成吉思汗石」なる名稱は、其後蒙古學者の間に於て無批判に採用せられた。彼等の此の態度は孰れも其の根底に於て、碑銘は直接成吉思汗の事績を叙述して居り碑石は彼の意志に基いて建設されたものとの確信を前提とするものでなければならぬ。吾人は其の代表的な例として、之を「成吉思汗に關する紀

念碑」"Denkmal von Tschinggis Chan"と言へるシュミットに見るであらう。即ち彼は明確に次の如く斷言して居る。「本紀念碑の貴重なる所以は、唯に其が成吉思汗の建設に係ると云ふ點のみに止らない。蒙古字の最古の標本として、更には又蒙古人の精神發展の最初の成果として尊重すべき物である。……一二一八年成吉思汗はカラキタイを完全に征服した。従つて此の重大な且決定的な事件と關係附けられる本紀念碑の設立年代は、一二一九年又は遅くとも翌一二二〇年になければならぬ」と。シュミットに於てはサルタグルとカラキタイとが混同せられて居り、従つて之れに基く彼の紀年は全然誤つて居るけれども、兎に角上記する二個の既定條件に立脚せることだけは明瞭である。

然るに此見解は一八五一年ブリヤート人バンザロフによつて眞向から反對せられた。碑文の内容は「成吉思汗によるオノン河流域部族の征服」でもなければ「成吉思汗の惡魔追放」でもない。其所に見ゆるものは、一二二四年成吉思汗の甥イسنケが西域征伐の戦功により受領した分地分民の記録である。従つて碑文の主

人公は成吉思汗ではなくして其甥也松格大王であり、碑石は其の紀念事業であつた、とするのが其の主張である。是に至つて碑石の名稱は自ら一變せざるを得ない。代つて彼の提唱した新名稱「成吉思汗の甥イسنケ大王碑」は率直に如上の見解を表明するものと云へるだらう。要するにバンザロフの新見解は、從來 *verirke*「全體として」と判讀され來つた第四行第一語に別個の讀方 *Isinke* を決定し之を拙赤合撒兒の子也松格に比定する立場より當然展開する一結論であつたのである。之に對し、少くとも本語に關す限り同一見解に立ち乍ら而も相容れざる結論に到達した者はクリューキンであつた。

碑文の内容は「決してイسنケに對する分地分民の記録ではなくして、戰利品分配の爲に蒙古人が開催した射擊競技の記録である」と確信したクリューキンに於ても、バンザロフの提出せる *Isinke* なる讀方は否定されたのではない。其は決定的な主張として支持されて居る。唯前者に於てイسنケの影に全く姿を没して居た成吉思汗自身の役割が後者に於て再び其主要性を回復した點に兩者の結論は分岐するのである。

クリューキン「成吉思汗碑石」なる名稱に對して全然拒否の態度は探つて居ない。其は彼が碑文より解讀した射擊競技を目して恐らくは成吉思汗自身の司會・審判に係るものと測定し、此想定の下に碑文と彼との直接關係を容認したが故である。而も他面、彼は碑石が「何時」・「何處に」・「誰により」建設されたかの問題は之を斷定し得

ないとの見地より、發

見地に因む「ハルヒラ

碑石」——ウルリュング

河左岸に注ぐ支流は現

今ハルヒラ川と稱せら

れて居る——の名稱を以

てより適切なりと斷じた。要するにバンザロフ、クリ

ューキン兩者の見解の對立は、一に Isinke なる語が

碑文全體の上に演ずる役割の評價の相異に歸着するの

である。此點クリューキンの説は一見穩當なるの觀を

呈示する。併し乍ら少くとも碑文の示す Isinke を以

て諸王也松格に對應すると爲す限り、彼の見解は餘り

にも實證主義的に過ぎ懷疑的なりと評し得られないだ

らうか。蓋し碑文がイسنケの事績を記すのは、後述の如く其主文章に於てであり又碑文の發見せられたクイル河畔は明確に拙赤合撒兒・也松格父子の分に屬するの地域であつたから。

四、碑銘のコピー

碑文の判讀に正確な

拓本が必要なるは言を

俟たない。不幸にして

本碑文の研究者達は技

術の點より拓本の使用

を行はなかつた。彼等

は直接碑文に頼り或は

其のコピーに基いて其研究を遂行した。されば彼等の

研究を問題とする場合、其のコピーは先づ批判されな

ければならぬ。

本碑文のコピーは一八一八年「西比利亞通報」に附録せられたスパスキーの其を最初とする。尤も之は作成者スパスキー自身蒙古文字に通じなかつたが故に全く無價値なものに止まつた。事實シュミット以前に存

Handwritten text in Cyrillic script.

Handwritten text in Cyrillic script.

Handwritten text in Cyrillic script.

Handwritten text in Cyrillic script.

Handwritten text in Cyrillic script.

(第一圖)

シュミットのコピー

(ロシヤ帝室學士院報告所收)

在したコビーの種類は數種を下らなかつたけれども、其等は孰れも甚しく不正確にして互に一致する物は一も存しなかつた。一八三四年シュミットの發表したコビーは、かゝる當時の状態裡に於て完全に近く評せられたのも當然である。(挿圖第一参照)シュミットに次で碑文の解説を試みたバンザロフに於ても彼自身の手になるコビーが存した。(挿圖第二参照)彼の論文の序に於てサヴェリ

エフ P. Saveliev

はシュミットの

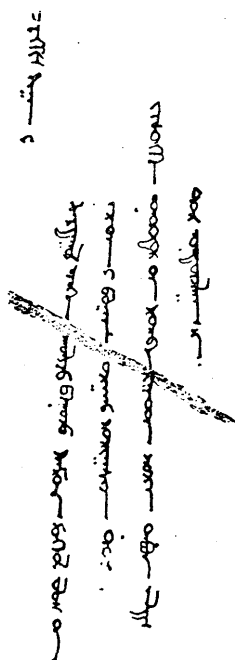
コビーに比べて

其が著しく正確

である旨を強調

して居る。併し

乍ら兩者の製作方法を考慮する時、本質的な優劣はつけ得られない。蓋し前者が専ら目測に頼りたるに對しバンザロフは透明な紙片を碑面に當てゝ原文の描寫を計つたと云ふ程度に過ぎなかつたが故である。却てクリューキンなどに言はしむれば、「シュミットは文字を多少角ばつた形に寫した」とは云へ、バンザロフに比べ



(第二圖)

バンザロフのコビー

(報月所掲
調查文
調譯
協會
氏
隣
善播)

ドロフが其の「蒙古遺物圖錄」(W. W. Radloff: Atlas der Alterthümer der Mongolei, Spb, 1892) 圖版四十九に掲げた物が其である。(挿

遙に多く古代文字の特色を保存した。彼は僅に二個の語形を誤つたのみなるに對し、バンザロフに在ては若干の語形の破損以外に多くの場合字母の側に附された區別發音符號を全然寫さなかつた」と、其のより粗笨なる状態が指摘されて居る。

此等一群のコビーに對して、全然其製作方法を異にする碑文の複製が最後に提出せられた。一八九二年ラ圖第三参照)此複製はベテルブルグのアジア博物館所藏に係る碑石の銅版に基いて作成された物であつて、「より以上碑文の明細を求める事は不可能である」とする作者の自信に背く所がない。極東に在て其研究に従事したクリューキンは、専ら此銅版寫眞をテキストとして其考證を組立てたのである。従て若しドロフの

複製が發表されなかつたなら、又よし發表されたとしてもかゝる信憑す可き製作過程を具へて居なかつたならば、碑文の原文に直接當る機會を持たないクリューキンの論文は完成しなかつたであらう。

幸にして本學東洋史研究室には、梅原助教が露都留學中に自ら拓出された拓本が藏せられて居る。恐らく現存する唯

一の拓本であ

つて、本碑文

研究の最も貴

重なる資料と

考へられるが

故に圖版とし

て之を掲ぐる

事にした。(圖版第三)比較してシュミット以下のコピーの確實性が識別されるであらう。

五、碑銘の解釋

最近迄に發表せられた碑銘の翻譯は計五種を數へる。最初碑石がコンヅー河畔に發見せられた當時已に

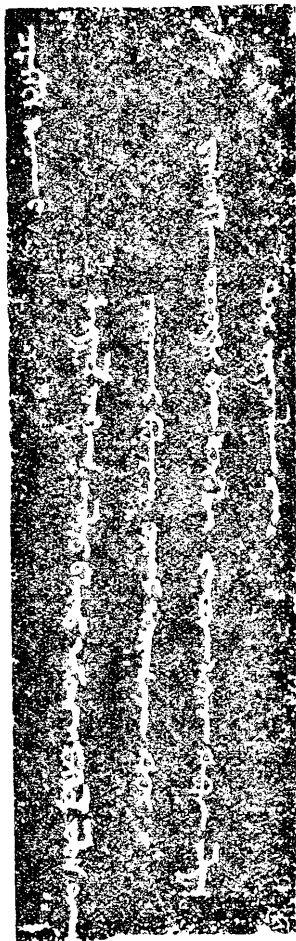
シベリアに於る通譯者ラマ僧達は之を斷片的に判讀して居た。

「成吉思汗……時に從つて……全蒙古民族……」

次で一八三九年キヤフタ市の蒙古語教師ブリヤート人ワンチコフによる翻譯が發表された。乃ち

「成吉思汗がサルト民族を占有し而て全蒙古民族を古

(第三圖) レニングラード亞細亞博物館藏 チンギス・カン碑銅版 (ラドロフ「蒙古遺物圖帖」收)



の屯營地に合併する事を許可したるの時、概してオン河畔に存る者共

は三百三十五人の使者の爲に征服せられたり。」

此翻譯は當時ペテルブルグ市に開催中の産業博覽會に碑石と共に陳列された説明書文に、碑文の音譯も無く全く單なる翻譯に過ぎなかつた。此點一八三四年ロシア帝室學士院會員シュミットの提出せる論文 "Bericht über eine Inschrift aus der ältesten Zeit der

Mongolen-Herrschaft”は、縱令其年次に於てワンチコフの其に先行す可きものとするも、而も簡單ながら碑文を學問的に取扱つた最初のものとして自ら類を別にして論ぜらる可きものである。彼は碑文の音譯に於て唯第四行第二語に對してのみ空白を残した。併し此語に對して彼は全く推測をも斷念したのではない。彼は其が個有名詞の生格形であるといふ確信と恐らくは本碑石の建設地を意味するならんとの推測の下に、可能なる三様の綴 Chondodur-un, Chondojoir-un, Ononodur-un を提出し、中に於て前二者を最も採る可きに近しと判斷した。蓋し Ononodur-un より類推さるゝオノン河は本碑發見地に餘りにも遠隔に過ぐるに對し、Chondodur-un, Chondojoir-un は碑石に關係深きコンジョーヤ河に一脈の連關を求め得らるゝとの理由によるのである。第四行第二語を除く碑文の全體に對して、彼は其等が孰れもアルゴン、ウルジヤイツ兩汗の書翰並びにイル汗國・欽察汗國の貨幣に見ゆる語と殆ど異なる所が無いとの理由を以て孰れも「短時日の間に解釋する事が出來た」と稱し其の音譯を發表した。

Čingis han-u

Sartagul irge ejeleju bagoju hanuk moŋgol olos-un
erten boga orgai horiksan dur
Yerūke ……-un gurban jagun gučin tabun elije
dur sinduralgan.

「サルタグールの民を征服し了へて歸國し、従前より全蒙古民族の間に蟠居せし不和を完全に解消せしめたる時、……の惡魔總計三百三十五に對し成吉思汗により追放の印として。」

彼の下した歴史的解釋は次の如きである。往時より全蒙古部族間に蟠居せる不和とは歴史的に認めらるゝ金朝・カラキタイ王國―シユミットは蒙古人の稱してサルタグールと云へるものはカラキタイに相當すると考へた―の蒙古遊牧民に對する離間政策を意味する。而も蒙古人は此現象を *elije* 乃ち空中を飛翔しつゝ不和・怨恨の種を蒔く鳥身女面の惡魔の業なりと見做した。本碑石は實にかゝる蒙古人のシャーマニズム的遺物であり、其建立はカラキタイ征伐との關係より當然一二一九―一二二〇年に繫けられねばならぬと。

併し乍ら以上の如きシユミットの見解は歴史的にも文法的にも支持され得ない事は、バンザロフの反駁に

盡きて居る。乃ち蒙古人に在てサルタグルとは回教徒特にクヴァラーズム王國を意味する。事實カラキタイ政略の當事者は哲別であつて一二一九開始された成吉思汗の西征は實にスルタン・ムハメツドに對するものであつた。是れ其の一である。其の二は彼の翻譯其物に認めらるゝ不自然さ、即ち *Sinduralan* (追放) なる名詞に終る彼の譯文はバンザロフ、クリューキンと共に「碑銘の末端には動詞が來なければならない。蒙古語に在ては名詞を以て完全文を完結する事は全くあり得ないから」と指摘せる如く永久に完全文たり得ない點である。

シュミットの説を徹底的に摧破して全く獨自の新見解を樹立したバンザロフに依れば碑文は次の如く理解せられた。

Čingis han-i

Sartagul irgen taulju bagoju hamuk mongol olos-un

arat-i Buga Sučigai huriksan dur

Isuŋke Koiŋgodor-un gurban jagun gučin tabun altak dur onduulaga.

「成吉思汗がサルターグル民族(ヒワ人)に侵入後歸途

に就き、而て總ての蒙古諸種族の人々がブガ・スチガイに集合した時、イスンケはホンゴドールの軍人三百三十五「人」を采地として受領しき。」

彼の新解釋は、勿論相當の古文字學的・言語學的考證を其の基礎として居る事は確である。併し乍ら他面彼の研究に於ては歴史的證明がより以上の部分を占むる事を忘れてはならない。バンザロフの考證はクリューキンの論文に詳細に引用批判されて居る關係上、次節、クリューキンの研究の抄譯中に包括する事にし、此所には専ら彼の歴史的註釋を紹介したい。

彼は先づドーソン「蒙古人史」中に(卷一、三) 次の一節を發見し、

「成吉思汗は一二二四年の夏より冬にかけて〔凱旋〕途上に在り。……其後彼は Bouca Southicou に於て軍隊の爲に饗宴を開き、一二二五年二月其のオルドに歸着した。」

其が年次・内容・地名を總じて、碑文の副文章に對して抱ける彼の豫想に一致せるを確信した。碑銘の從屬文、特に第三行第二語に對する Buga Sučigai なる判讀・並に其が上記の地名 Bouca Southicou に同一な

りとの解釋は其結論「此碑銘には其地に於て蒙古のクリルタイが開かれたとドーソンよりも一層精確に表現されて居る」と共に此確信に基く決定に他ならなかつたのである。

次で彼は此碑文の主人公イسنケを歴史的人物中に物色して、遂に拙赤合撒兒の子也松格に求めた。蓋しラシード・アル・ディン「年代紀彙集」にデュチ・カサル、イسنケ父子の分地として指定さるゝ蒙古の東北端、Argun, Hailar 河、Kula-nor 湖の境上とは、本碑石發見地に符合するに近き事が其理由の一であり、成吉思汗よりデュチ・カサールの三子也古^{エグ}、也松格^{イسنケ}、禿忽^{トグ}に賜與された各一聯隊の軍隊を以て一千人隊を合成したと云ふ所傳が又碑銘の示す三百三十五戰士の分配に數量的に矛盾せざる點を第二根據とするものである。續いて彼はイسنケの獲得したる軍士とは當然當時アルグン河畔に遊牧せる部民なる可しと如上の解釋を展開して、ホンゴドルの名を第四行第二語に適用し、最後に「イسنケ大王碑石」が彼自らの手によりタイルタイル河畔の館の傍に建立せられし年代を想定して「イسنケが死する稍以前」となし、之に一二二

四—一三〇〇年(一二三〇?)のデイトを與へたのである。

以上バンザロフの歴史的證明を考察する時、先づ銘記されねばならぬ事は、彼が碑文の第四行第一語にイسنケなる讀方を確定し、其が拙赤合撒兒の子移相哥大王に相當す可きを證明すると共に從來「成吉思汗碑石」の名稱の下に誤解され來つた内容を訂正した功績であらう。其にも不拘此の歴史的解釋には多くの無理が潜んで居る事を忘れてはならない。例へば碑石建設年次を決定するに當り、成吉思汗の一族諸子に對する分封は一二二四年に初まり以前には在り得ないとか、イسنケ(秘史に也松格・元史憲宗紀に亦孫哥・世紀祖に也先哥・也相哥・世系表に移相哥大王とみゆ)の晩年は一二三〇年頃(バンザロフ説を紹介せるラウフェは之を一二三〇年と記す。併しバンザロフは他所に於てイسنケが憲宗即位の式に列席した事に言及して居るから、彼がイسنケ晩年を一二三〇年と斷じたとは考へ得られない。播磨氏の譯文には一二三〇年と示されて居る。一二三〇年(大徳四年)は又餘りに遲きに失する。蓋しイسنケは中統・至元の初に七十五歳)に相當するであつた(元史譯文證補)と傳へられるから。)に相當するとか言へる謬見乃至 Buga Sügigai, Bouca Soutchicou の比定—比定と言ふよりは寧ろ Bouca Soutchicou の文献の故に無條件に Buga Sügigai なる讀方を決定したと評す可き—の如き其の最も尤なるものであらう。

後來彼の説に對する非難が期せずして此の方法論に集中されたのは理由なきものではなかつたのである。ボズドニエフの其は典型的な一例でなければならぬ。

「蒙古文學史講義」(A. M. Pozdnev: Lekcii po istorii mongol'skoi Literaturii. 1896—7) 中に彼の下せる批判は次の如きである。「バンザロフの歴史的解釋を考察するに、余は彼の提出せし歴史的證明が殆ど批判に耐へ得ぬものなるを認めるのである。蓋し彼は碑文其物に依て歴史を説明する事なく、反つて顯著な歴史事實を以て碑文其物を解説せんとした爲である」と。さればラドロフに於ても(W. W. Radloff: Atlas der Alterthümer der Mongolei. 1892) ヴリオに於ても(P. Pelliot: Les systèmes d'écriture en usage chez les anciens Mongols. "Asia Major" 1925) はた又ラウフマンに在て(B. Laufer: Očerk mongol'skoi literaturii. 1927. transl. by V. A. Kazakevič from "Skizze der mongolischen Literatur" 1907) 彼の解説に對しては未だ不完全なりとの斷定が一樣に下されて居るのである。

バンザロフの此研究を反駁改訂せんとして最後に提

出された翻譯はクリューキンの其であつた。彼が「イスケ碑石」なる名稱を斥けて「ハルヒラ碑石」乃至「クイルクイル碑石」なる題目を掲ぐる態度に其の一端は已に表明されて居る。彼は極東に在て碑文の原文に接する機會を持たなかつたが故に、専らラドロフの手に成る銅版寫眞に依據せざるを得なかつたのではあるが、而も此の銅版寫眞たるや、既述の如く、其の製作過程に於て目測又は之に類するシュミット・バンザロフのコピーに比べ寧ろより科學的な性質を保持して居た。而も彼が結論に於て、本碑石が漸く75パーセントの解決に達し得たらうと爲し完全な解決を斷言するを保留する用意を怠らなかつた慎重さは、碑文解讀に當つても専ら歴史的證明に重心を置けるバンザロフの態度を排して、一に古文字學的文法的方法に頼つた態度と相俟つて其の主張を可及的に高く評價せしめるものであらう。

Činggis han-i

Sartagul erhe tǵulijū bagūju hanuḡ moḡol olos-un
noyon-i bogtoḡočiḡar (?) horiksan dur

Istūke ontodor-un ḡurban jāḡun ḡučin tabun aldas

dur ontuduluga

「成吉思汗がサルタグル政府を征服して歸還し、蒙古部族の全ノヤンをして弓の射撃競技を行はしめし、際、イステンケは距離三百三十五尋^{アルダス}に於て標的を射當てたり。」

所謂「成吉思汗碑文」を是の如き内容として解讀したクリューキン^{アルダス}は更に次の如く其理解を敷衍した。乃ち「此競技會は卷狩の熱愛者たりし成吉思汗の司會審判に係り恐らくは前後七年に亘る西征の勝利を祝して其鹵獲品の分配が賭けられたものであつたらう。碑文は此競技會に於て拙赤合撒兒の子也松格が樹立した新記録を紀念する爲に司會者が命じて作成せしめたものと推測される。今文献の示す從來の射撃距離レコードを按ずるに、先づキャン・ボルチギン族に於ては「大弓を以てすれば九百歩の遠距離に命中せしめ小弓を以てするも尙五百歩の外に的中」せしめた拙赤合撒兒を屈指の射手とするをはじめ^{（蒙古舊傳）}北京ロシア傳道師報告^{（四頁）}、コンスタンチノーブル隨一の射手スルタン^{（一〇七頁）}、ムラド^{（二頁）}ガジス四世に一二五呎^{（シュテルン）}南部ロシア報告^{（二頁）}、古代ギリシア人には一六九二呎^{（セスタコフ）}（本學考古

學史上に於ける二時代^{アルダス}の記録がある。一尋を以て最小極東大學々報^{（十四）}の記録がある。一尋を以て最小六呎・三步に見積れば拙赤合撒兒のレコード三百尋^{アルダス}は一八〇〇呎、イステンケのレコード三三五尋^{アルダス}は二〇一〇呎に相當する。イステンケの技能が紀念碑の設立に値する事は理由なしとはせないであらう」と。

彼の説を通じて指摘し得る疑問は尋^{アルダス}の換算である。

乃ち彼の引用せる上記拙赤合撒兒のレコードは、バライ^{アルダス}譯元朝秘史（A. Palladii: Starinnoe mongol'skoe skazanie o Cingishan. "Trudi členov rossiskoi dukovnoi missii" Tom. IV）には正しく九百歩と譯されて居るが、秘史の原文は之を也孫札兀惕^{阿勒答} yisun jagunt alda[s] 乃ち九百アルダスに作つて居る事である。尤も明譯が之を九百歩に譯すより推して、巴拉ジイの譯の由來は推定されるのであるが、而も其譯の不適切なる點は否む可くもない。此點那珂博士の譯「九百尋」に従ふ可きである。かく論じ來る時、クリューキンの一アルダン^{アルダス}六呎の説は當然更に縮小さる可く從つて其主張も又變更を見ねばならない。乃ち「上記トルコ人・ギリシア人のレコードが孰も單なる遠矢の其であつたのに對し、イステンケのレコードは實に命中

距離の新記録であつたのである」と。彼は續いて、成吉思汗より箭筒士の長に任命された也孫帖額 (Palladi: *Ibid.* P. 126, 129) を以てイスケー——即ち拙赤合撒兒の子也松格——と同一人に非るかと思像を試みて居るが之はあく迄單なる想像に過ぎない。兎に角、「何時」「何處」「誰により」「碑石が建立されたかの決定を保留せるクリューキンに於ては、推測と考證とが截然區別されて居る點に特徴があり長所が存すると評し得られるのではなからうか。

六、クリューキンの研究

著者クリューキンはヴラジヴストークの國立極東大學東洋學科助教授にして其の蒙古語に關する研究としては、「蒙古・ブリヤート人の詩歌に現はれたる倫理的要素」*Etiškie elementui v Poezii mongolov i buryat. "Jizn' Buryatii" No. 9—12, Verxneudinsk 1925*、「イル汗アルグンよりフィリブ・ベル王に宛てた一二八九年附書翰の内容」*O čem pisal Il'-han Argun Filippu Krasivomu v 1289 g., Vladivostok, 1925*、「現代蒙古語・蒙古字研究の爲の解説」*Ključ k izučeniju*

jivoi mongol'skoi reči i pis'mennosti. "Trudni gosudarstvennui dal'nevostočnuui Universitet. ceriya W, 2, Vladivostok 1926、「イル汗ウルジャイツよりフランス王フィリップ四世・英國王エドワード一世及び特に十字軍士に送りたる書翰」*Pis'mo Uldzeitu il'-hana k Filippu Krasivomu, Eduardu I-mu i pročim krest'nostsam. "Trud. Gos. Dal'nevostok. Univers., ser. W, 2, Vladivostok 1926* 等が知られて居る。此所に紹介せんとする「成吉思汗碑石」に關する彼の論文「ハルヒラ碑石(成吉思汗碑石)に關する彼の論文「ハルヒラ碑石(成吉思汗碑石)に關する彼の論文「ハルヒラ碑石(成吉思汗碑石)に關する彼の論文」が國立極東大學學報六卷五號誌上に發表されたのは一九二七年の事であつた。併し之は云はば改正版とも云ふ可きもので、其の第一次研究論文は結局未發表に終つたけれども已に一九二五年完成せられて居たのである。と云ふのは同年之が提出を受けたブリヤート蒙古共和國學術委員會が最初レニングラードに於る之が出版を約したに不拘、其後或事情の爲に之を履行しなかつた。蓋し論文中、前にシュミットに對して加へられたベンザロフの痛烈な反駁をクリューキンが再批判せる箇所

が同じブリヤート人學者達の感情を害したのである。剩さへ彼等は著者の再三の要求に對しても原稿の返還すら肯んじなかつた。クリュキンが再び論文を作製せねばならなかつたのはかゝる経緯の結果であつた。併し乍ら此際彼はウラジミルツォフ(B. J. Vladimirtsov) シュエスタコフ(D. Šestakov) の教示を斟酌するの機會に恵まれ從來の見解を改訂する所が尠くなかつた。特に碑文の第三行第二語に對する彼の新見解は多くウラジミルツォフに負へる事は其序文に彼が明言する所である。

以下に掲ぐるものは其の抄譯である。尙原文は立論の順序を第四行より始めて居るが、此所には便宜上配列を改めて掲げる事にした。

〔1〕成吉思汗の正字法は *čingis* に非ずして *čingis* である。

〔2〕シュミットは *han-u* と生格の形に、バンザロフは *han-i* と對格の形に讀んだ。蒙古語に於て主語は場合により生格の形を探り得る。其は從屬文にして而も客語が與格の形を探る場合に於てのみ許さるゝ法則である。サナン・セチェンに *Sidurgu hagan-u mogai*

bolon hobilnoi dur……「シヅグ可汗が悪人に變つた後……」の如き其例である。併し此法則は本碑文の場合には適合し得られない。蓋し其客語 *boga orgai horikan* は右條件を具へないから。他面碑文の示す古文字的特徴は十分之に *han-i* なる讀方を與へ得るだらう。(〔1〕参照)

〔2〕コピーの示す限り、シュミットの讀方は正し。 *irhe* なる語はアルグン汗の書翰第二十行に *erle* 「政府」の意味に於て示されて居る。之に對しバンザロフの讀方 *igen* が原文に相異する事は、〔N-1〕Isnake の語尾と比べて明瞭である。

〔3〕本語は其頭部を龜裂の爲に破摧されて居るが副動詞の語尾 *ju* を具へて居る事及び文章中に占る位置より次の如き限定を受ける。乃ち *Sartagul irhe* が成吉思汗の *bagoju* 「歸還して」に先行して自ら經驗した行爲を意味する術語でなければならぬ。此點バンザロフが字母 *u* を龜裂中に失つたと見倣して之に與へた *taujuu* の綴はシュミットの *eičejin* 「占領して」より遙に原文に適すると思はれる。蓋しサナン・セチェン、アルタン・トフチに於て「征服する」の意味は往々 *tagulihu*

を以て示されて居るから。

【**II**】シュミットは之を *ereti-i*「古き」と讀んだ。

バンザロフは古文字學の法則に合はぬとの理由を以て之を斥け、新に *arati*、乃至 *ereti* の讀方を提出し、此場合に適合す可きものとして前者「人々」を採用した。併し乍らシュミットのコピーもバンザロフのコピーも其の示す所は僅に *e*, *r*, *i* の四字母に過ぎない。従つて本語を解して *ereti-i* 乃至 *ereti*, *arati* とするには字母の不足を感じざるを得ない。尤もバンザロフは「本語の基本線は字母 *r* の直後に於て引延ばされて居る。之は字母 *a* が其所に存在する事を示すものである」と説明を加へては居るが、かゝる説明は其に先行して、古代蒙古語の綴字法には基本線の伸縮を以て母音を指示する法則が存した事が證明されねば無意味である。

之に反してラドロフの銅版寫眞は本語の左側に二個の點を寫して居る。一は本語の最初の齒の傍に、他は從來 *t* と讀まれて居た符號 **𐰇** の下端に於てである。頭字母が *n* である事は之に依て決定される。以下第二字母に想像しうる *r*, *ei*, 第三字母に想像し得る *on*, *t*

の變化を組合せて、吾人は *nron-i*, *nrt-i*, *nēion-i*, *nēiti* の綴を得るであらう。然るに蒙古語に於て *noṣ*, *noṣr* の如き結合は語の初に生じ得ない。是に於て吾人は第二字母を詳細に検討し直して、其が大きき・屈折の點に於て *Sartagu*【**II**】・*horiksan*【**III**】・*gurban*【**III**】の *r* に等しからず又 *čingis*【**II**】の *ei* にも異なるを發見し、其所に橢圓の破損した字母 *o* を認めたのである。本語はかくて *noyon-i* と讀まねばならぬ。

是に於て吾人は簡單ながら、碑文中接尾語 *i* を伴ふ二個の名詞 *han-i*【**II**】・*noyon-i*【**II**】の文法的性質に就て一言したい。バンザロフは此問題に關しゴブロフニコフ「蒙古カルムク語文典」四七七節に依據し次の如く言て居る。「*han-i* 及び *arati* の二語は蒙古語に存する規則に従ひ、形動詞 *huriksan*「集合したる」の主語として對格の形を採つて居る、之は恰もラテン語に於ける不定形を伴ふ對格に類する」と。かくて彼は碑文の從屬文を *Čingis han-i Sartaguṣ iṣgen tauṣ iju bagoiu hanuk mongol oṣos-un arati Boga Sučigai huriksan dur* ……「成吉思汗がサルタグルの民を征服して歸國し、全蒙古部人がボガ・スチガイに集合し

た時……」と譯し、其所に二個の主語を認めたのである。併し乍らバンザロフが提出した文章論は此場合の説明として不十分である。彼の説明よりすれば、蒙古語の接尾語 *i* は一般に對格のみならず主格・生格の符號たり得ると云ふ理解を與へるだらう。蒙古語に於て接尾語 *i* が主格・生格・對格を表はす事は事實である。

例へば「ゲセル汗物語」に見える文章

(1) *ūhin-i-barba.*

(2) *ūhin-i-segičin-i-miha tasuraju doholang bolba.*

に於て、例文一は「娘を捕へた」の意味にして、明かに對格を示す。之に反し例文二に於て其客語 *doholang bolba* と論理的關係を以て示された *ūhin-i* は、例一に於ると同一の形を具へて居をに不拘、吾人は之を主格に解する。更に *segičin-i* に至つては生格の意味を認めねばならない。換言すれば例文第二は *ūhin-inu segičin-u miha tasuraju doholang bolba* 「娘は股の肉を傷いて跛となつた」と書き變へられる如き是である。併し此等の例は決して無制限に許さるゝ性質のものではない。無論其所には自ら條件が要求されて居る。ボロフニコフの文典はバンザロフが不十分に引用した

條件に對しラテン語の *accusativus cum infinitivo* との同一を否定しつゝ更に次の限定を加へて居る。「主格が對格の形を探るのは獨り形動詞が位格に相當する場合である」と。かゝる場合、乃ち主語が對格の形を爲し客語が助詞 *dur* を伴ふ形動詞たる場合に在ては、——此場合其は從屬文でなければならぬ——かゝる從屬文は通常夫々一個の主語・客語を有す可き筈であつて、バンザロフの翻譯の示す如く、二個の主語 *han-i, arat-i* と二個の客語 *bagoju, hurikan* を具へる事はあり得ない。従つてバンザロフにして若し *hurikan dur* を以て本從屬文の客語なりと見做したとすれば、彼は第二の主語 *arat-i* の役割を示す事は出来ない。と云つて副動詞 *bagoju* は當然此の從屬文の客語たり得ないであらう。此事は本從屬文と全く構造を同じくするサナン・セチェン中の次の一節

Čingis han Tangut dur huraju Tūrmehei bolgasun-i gurban dabhor buseleju egerchūi dur 「成吉思汗がタングートに集軍し、ツルメヘイ城を第三回目に攻圍せし時」に徴して明瞭である。

かく考へる時、本碑文中、接尾語 *i* を伴ふ二名詞

han-inoyon-i (バンザロフの讀み方に從へば arai-i) は、前者を以て對格の形を探れる主語と爲し、後者は形の示すまゝ其直接目的語と解して正鵠を失はない。

【2】從來諸研究者が其の解説に最も困難を感じたのは本語であつた。従つて其解決は碑文の全内容の決定に基石の役割を演ず可きものである。然るに碑石を横斷する龜裂は本語の眞中を通過して居り、爲に其の決定的解答は永遠に不可能なるを思はしめる。之を boga oŕgai 「凡ゆる不和」と譯したシュミットの説はバンザロフの反駁に會して先づ潰へた。然るに之に地名 Buga Suŕgai を認め、續く動詞—彼は之を huriksan 「集合する」と解した—と結合して「ブカ・スチガイに集合したる時」と解したバンザロフの主張も其理由は極めて簡單なものに過ぎなかつた。「Buga Suŕgai は位格の符號無しに示されて居る。其は此語が動詞 huriksan の前に位置し兩者の關係が明確である」と云ふのが其である。吾人は先づ蒙古語に於て文章中、地名・人名が與格の場合其の位格の符號なしに放置され得るか否かを調べねばならぬ。本文章と文法的構造の酷似する一例がサナン・セチェン中に見受けられる。即ち

Hoorlos-un Naran hagan horin tümen horlas yian
abun uktoju Hürihe Hühher degere baitohoi dur...
「ホルロスのナラン汗は二十萬のホルロス人を迎撃せんとて、フリヘ・フヘルに戦ひし時……」此場合地名 Hürihe Hühher には明に與格の助詞が添へられて居る。今バンザロフの説に従つて derege を省略せんか、本文章は完全に無意味に化するであらう。

他面古文字學的特徴に於てもバンザロフの斷定は再考す可き餘地を持つて居る。乃ち本語の上半—其はシュミット、バンザロフより等しく boga, buga の綴を賦與せられた—に於て、最初の三字母に對しては之に異義を挟み得ないとしても、第四字母に關する限り之に a 以外の讀方を認める事は全然不可能ではない。ラドロフの銅板寫眞は漠然ながら字母 *al* を想像せしめて居る。次に本語の下部—シュミットは之を oŕgai と讀み、バンザロフはシュミットの認めて r とせる字母を完全な綴と解し、更に龜裂中に没したと見做す s を加へて七個の字母 Suŕgai に復元した—はラドロフの銅板寫眞に最もよく傳へられて居る。乃ち龜裂中に湮滅した語頭の左側には、前二者のコピーには脱漏せら

れた二個の分別發音符號が正確に保存せられて、本語の頭部に *go* 又は *gu* の綴を確認せしめて居る。同様に最後の字母に於ても又 *han-i* [i e]・*noyon-i* [i 1] の語尾の形に比べて寧ろ *r* に近きを悟らしめられるであらう。吾人はかくして *gočigar*, *gučigar* の形を復元する。然るに古代ウイグル蒙古字の正字法に於て、語頭の *g* は通常分別發音符號を伴はない事實——碑文中の *gučin* [Ne]・*gurban* [Ne] は之を例示して居る——を併せ考へる時右の *gočigar* 乃至 *gučigar* は當然男性母音に續かねばならない。

以上の考察の結果、吾人は本語を以て二語と解し來つた從來の見解を全然放棄して之を龜裂により二分せられた一語と讀む可きを主張する。此場合上半 *bogt bogd*, と下半 *gočigar* を接續す可き男性母音として最も適切なるは *o* である。かくて數種の組合せの中から吾人が *bogtoğočigar* なる綴を特に擇出せんとするものは、其が語根より推して「契約・協定・競技」に相當する語に最も近いと推察されるからである。即ち *bogtol* 「約束」 *bogtolahu* 「約束す」 *bogtoğaçi* 「相手」 「守れる約束」(ボプロフニコフ文法・六八頁)等は *bogto* を語根とする

語であり、又 *bogača* → *bosa* 「賭・賭事・競技」 *bo-saldoh* 「賭る」 *bogogda* → *bōgda* 「賭事」等は之に極めて親近である。余の提出せる讀方はかゝる *bogtoğaçi* に *instrumentalis* の助詞 *gar* の附いた形に他ならぬ。

本語は續く動詞 *horiksan*——此語が動詞 *horihu* 「決定する」(辭書・九五五頁)の形動詞過去形なる事は下述する所である——と結合して文法的に矛盾なき文章 *bogtoğočigar horiksan dur* を形成する。文字通りに譯すれば「競技する所の相手を以て指定する」・「競技に就て理由を指示す」となる。要するに此語句を以て碑文の作者は射撃競技の條件・儀式を叙述したものと考へ得られるであらう。

「[e]」シュミットは之を *horiksan* と音譯し「憎惡を」絶やしたる」と意味を附した。之に對してバンザロフの見解は次の様である。「蒙古語 *horihu* は「垣を圍らす・遮斷す・禁止す」の意味こそあれシュミットの説くが如き「阻止す・絶やす」の意味は存しない。此語は *huriksan* と讀む可きである。*huriksan* とは「集合したる」の意味にして現今已に廢されて居るが

其派生語より知られる動詞 *hurimoi* 「集まる」(「チャガタイ語 *hurimak*) の形動詞過去形である」と。碑文は明かに *horikan* = *hurikan* なる綴を示して居る。バンザロフは特に *horikan* より *hurikan* を選んだのであるが果して彼の主張する如く此語に「集まりたる」の意味を認め得るだらうか。先づ此を検討せねばならぬ。現今蒙古人は *horihu* = *horhu*, *hurahu* の二動詞を持つて居る。 *horigul* 「垣・風よけ・羊小屋」 *horim* 「集會・客・酒宴」 *horilta* 「禁令・概要」 *hural* 「集合・集合地」は此等と同種の一群の名詞である。此等一聯の語の言語學的特徴は *ok* 「場所・矢筒・ポケット」を共通の語根とする事である。此語根は「結合・集合・一全體を形成する集合的部分」の意味を與へる。 *horihu* = *horhu* と *hurahu* とは同一語根を有する結果、兩者の意味は極めて近接ではあるが而も同一ではない。前者は後者に比べて、最初に語根 *ok* より生じた形である。後者は *hori+ga+hu* → *hori+a+hu* → *hurahu* の順を以て生じた物に他ならない。従つて *horihu* は「環中に禁錮す・鎖をかけめぐらす・外出を禁ず・境界を定める・説得する」の如き、要するに行

動の端緒を意味するに對し、*hurahu* は委任相の形を具へて居る丈に「圍遶す・攻圍す・集合す・一つに集結す」の如く、行爲の若干の完結を示すのである。かく觀じ來る時、*horikan* = *hurikan* の形を明確に碑文に示されたる本語は、當然 *horihu* の形動詞過去形 *horikan* たる可く、其の委任相 *hurahu* ではあり得ない。従つて *hurikan* に「集合する」の意味を當てんとするバンザロフの見解は到底成立しないであらう。

[W1] 本語はバンザロフ以前の翻譯者により *yeruh-ke* 「全體として」と解せられて居た。凡て其第三字母を *r* と誤つた結果である。之が字母 *s* たる事は *horiksan* [see] の形を参照して明瞭である。吾人はバンザロフの讀方 *Isuke* の決定的なるに従ふ可きである。

[W2] 本語は從來誰にも完全には理解されなかつた。ワンチコフは、彼の譯文より推して、之に *Ononodur*, *Chondodur*, *Chondojor* 三様の讀方を假定し而も最後の決定は之を保留した。バンザロフは其の提出せる五種の綴 *Ontodor*, *ondodor*, *onhotor*, *honhodor*, *hongodor* 中、單に其が彼の歴史的證明に最も適合す

るとの理由で特に *hongodor*—彼によれば現今イルク
 ツク縣アラル管區在住のホンゴドル部族は嘗てア
 ルグン河畔に遊牧し、イスンケの隸民に屬して居た—
 を探る可きとした。蓋し碑文全體の意味上、イスンケ
 大王の分地を構成す可き蒙古部族名が本語に表現せら
 れて居なければならぬとの豫想に立脚したのであ
 る。併し乍ら此の解釋は餘りにも原文と背馳する。さ
 れば流石にバンザロフも「此語は碑銘中最も多く破損
 を蒙て居り、頭字母 *h* は *t* に變形して了つて居る」と
 辯明せざるを得なかつた。

然るにシュミット・バンザロフ・ラドロフ三者の寫
 しに於て、本語は其輪廓の描寫に相異が存しない。従
 つて此等三コピーは原文を正確に寫したものと斷じ得
 られる。而も本語の各字母の特徴は、此等コピーに於
 てすら、他の語以上に好く保存せられて居る事は一見
 明瞭であつて、此點本語を目して「最も破損を蒙れ
 る」とするバンザロフの確信は何ら根據なきものとな
 る。バンザロフ自身も是認せる如く、本語は確に *on-*
odor—*ondodor* と讀まねばならない。*hongodor*, *on-*
hotor なる讀方は全くバンザロフの創造に過ぎない。

其は *hamuk* [ʰe] *horiksant* [ʰe] *gurbant* [ʰe] *gücin*
 [ʰ5] に於て、字母 *h* || *g* は孰れも形大に、凸起著し
 きに參照して肯かれよう。或は又、*g*, *h* を區別す可
 き分別發音符號が本語の中央部に存しない點に於て同
 様である。

ontudur-un なる形は名詞の生格形と考へられると
 同時に形動詞過去形とも見做し得られる。併し乍ら此
 問題の解決は容易である。と云ふのは、以下に續く語
 句、即ち本碑文の主文章を修飾する *ontuduluga* 「射中
 たり」[ʰ1] との關係上、形動詞たるを得ないから。
ontuduhu と等意義の動詞 *ontusuhu* 「上方に射る、
 遠方に射る、標的を射當る」が其の對象名詞として
ontusuma 「箭の飛翔、距離、遠方に射られた箭の飛翔
 距離」(ゴルスツン) を有するを參照して、同一の意味と
 關係とを動詞 *ontuduhu* 名詞 *ontudur* に認める事は
 全く可能である。

[ʰ7] 從來 *elëis-dur* 「使節等により」*elive-dur* 「惡
 魔に」*alak-dur* 「軍人に」の三様の譯が之に與へられ
 て來た。本語の解釋は、先づ其が正確に與格の形に譯
 される事が第一條件である。此點シュミットの解釋は

不完全たるを免れない。彼は本語を譯して三格の形とはして居るものゝ、其に對應する動詞を脱漏し遂に完全文を構成する事が出来なかつた。最後にバンザロフの *altak dur ondulaga* に於ても同様である。彼は動詞 *ondomoi* に原因形の添尾辭を附して被動詞的に用ひられるとする動詞 *ondulamoi* を想像し、其過去形 *ondulaga* 「分離された、分割された」を以て與格形の補語 *altak dur* に應ぜしめ、之に「戰士等に分割せられた」戰士等を采邑として受領した」の意味を與へたのである。併し乍ら彼の主張する如き動詞形態の不規則な構造と云ふ點を認めたとしても、余は其の *altak dur ondulaga* なる表現に在て、助詞 *dur* が全く不當なるを指摘せざるを得ない。且成吉思汗時代 *a* なる語は中隊の意義に用ひられた。従つて *altak* とは之を構成する軍人を意味するとの彼の説は何等根據がない。當時、直接軍人を表はす語は獨り *cegis* あるのみであつて、(アルゲン汗の書翰參照) *altak* 乃至之に類する語にして「軍隊の單位」「軍隊を構成する一部分」の内容を有したるものは現今ブリヤート蒙古語中に一も傳へられ居ない。

他面コピーに關して云ふも、①本語の第三字母 *t* はシユミット・バンザロフ共に其の環狀線の左端を切斷し右端を基本線に接觸せしめる等甚しく正確を缺いてゐる。字母 *t* はラドロフの銅版寫眞に在ては他の三通りの使用箇所、*Sartagui* [I I] *ontudur* [Me] *ontudulaga* [V I] を通じ明かに環狀線の一端を基本線より分離する。従つて本語に於て基本線に接觸せるかに見える箇所には、別個の獨立符號が識別されねばならない。②最後の字母は *s* であつて、決してバンザロフの如く *k* と見做す事は出来ない。其は *Cingis* [I I] *hanuk* [V s] の語尾と對照すれば十分である。かくして吾人は本語に *aldan* 「兩手を擴げた距離」の複數形 *aldas* を認める事が出来る。*aldan* とは當時よく知られた語で往々射手等は *alda delim* 「張つた弓の倍の間隔」と續けて使用した。之は「兩手を一杯に擴げた距離」の別の表現に他ならない。(ゴルスツン書)

[V I] 本語は碑銘の最後に位置し、従つて本文章を完結する動詞でなければならぬ。*sinduralgan* 「追放」と名詞に解したシユミットの譯が此點誤まれる事は已述の如くである。バンザロフは之を *ondulaga* と

音譯し「分離された、分割された」↓「分前に受けた、采地として受領した」の意味を想定した。彼の論據とする所は次の如きである。「語格 on は其派生語より推して對照・特殊性・分離・分配の意を有す。語根 on より動詞 *ondomoi* が派生し得る事は明かである。之に原因形の添尾辭を附して生ずる *ondulamoi* は受身動詞の代りに使用される。*ondulaga* は其過去形であつて「區分された」の意を持つ。現今蒙古人の間に動詞 *ondoinoi* が「突出す、周圍の物より鋭く分離す」を現して居る事は之を證明するだらう。*ondoinoi* の語根 *ondoi* は *ondomoi* の語根 *ondo* に *i* を附したもので物體の外部の靜止を示す」と。

バンザロフの此見解は彼の豫想する碑文の内容に餘りにも附會するものである。成る程蒙古語 *ondoihu* に確に「突起す、膨れる、上に突出す」の意味が在る。併し乍ら「外部に向つて何物かの分離・排出」乃至「平面上に存する明確な物體」の意味を與へる語根は *ondo* であつて決してバンザロフの主張するが如き *ondoi* ではない。*ondoi* には反つて別に「空虚な、些細な」の意味がある。*ondoi hooson yabuhu* は「何物にも達し

ない、何物をも受取らない」を現はす。(ゴルスツン) されば動詞 *ondoihu* が現存せざる *ondulahu* の意味内容を如何にして間接に説明し得るだらうか。殊に其意味が「采邑として受領する」等といふ事がどうして決定し得られるか。縱令一步譲つて *ondoihu* 乃至 *ondoi-yahu* 「別にする、脇に置く」を以てしても「相續財産の分配」「采邑の分配」などの意味は掬取り得ないのである。更に又 *ondulaga* を分析して「*ondul* *aga* + *la* + *ga*」と爲すを見ればバンザロフは本語を以て形動詞過去乃ち「過去の完了形」と認めたに相異ない。果して然りとすれば、シユミットの *sinduralgan* に對してバンザロフの提出した反駁「碑銘の最後には動詞が來ねばならぬ。蓋し蒙古語に於て名詞は常に完全文を完結しないから」は其まゝ彼自身にも適用さる可きである。蓋し語尾形とも完全文形とも認め得られぬかゝる語形を以てすれば、本碑文は無教養な者乃至蒙古人に非る者の手に作製されしを想はねばならないから。

本語は其上部 *ont=ond* と下部 *laga* がはつきりして居る爲に多少不分明な中間部を回復する事が出来る。

然りゝの前に u、u の前に t || d の字母は比較的容易に認め得られる。最後に此の t d と ont の最後の字母 d の間に延びて居る基本線の上に剝落した半楕圓の跡が辛うじて識別し得られる所から、吾人は此所に字母 o || u を復元し得るであらう。

古文字的特徴を辿つて吾人はこゝに ontudulaga なる語を得た。此語は疑もなく on「距離」と tushu → tuduhu「命中す」の二部より構成されて居る。ontudulaga は現今の動詞 ontuduhu の完了形 ontudulaga (口語の outudala, ontumā) に等しく、「命中した、到達した、射當てた」の意である。アラルスク、ツンキンスク方言には現に狩獵競技に關する特殊な表現 saga tudahu「的に箭を射る」(ポドゴルブン辭書)が在るし、又 ontusuksan somon iyar sanaksan i ulū onohu「上方に(遠方に)發射された箭を以てしては所望の目的は得られない」の句(コツレフス辭書)の如き其の一例を提供する。

以上ラドロフの銅版寫眞を基として考證した結果、私は碑文の全語に次の音譯を與へるに至つた。

Činggis han-i
Sartagui erhe taguliju bāguju hanuk moŋgol olosun
noyon-i bogtoŋočiŋar(?) horiksan dur
Yisünke outodor-un gurban jagu gučın tabun aldas
dur ontudulaga

(譯文省略)

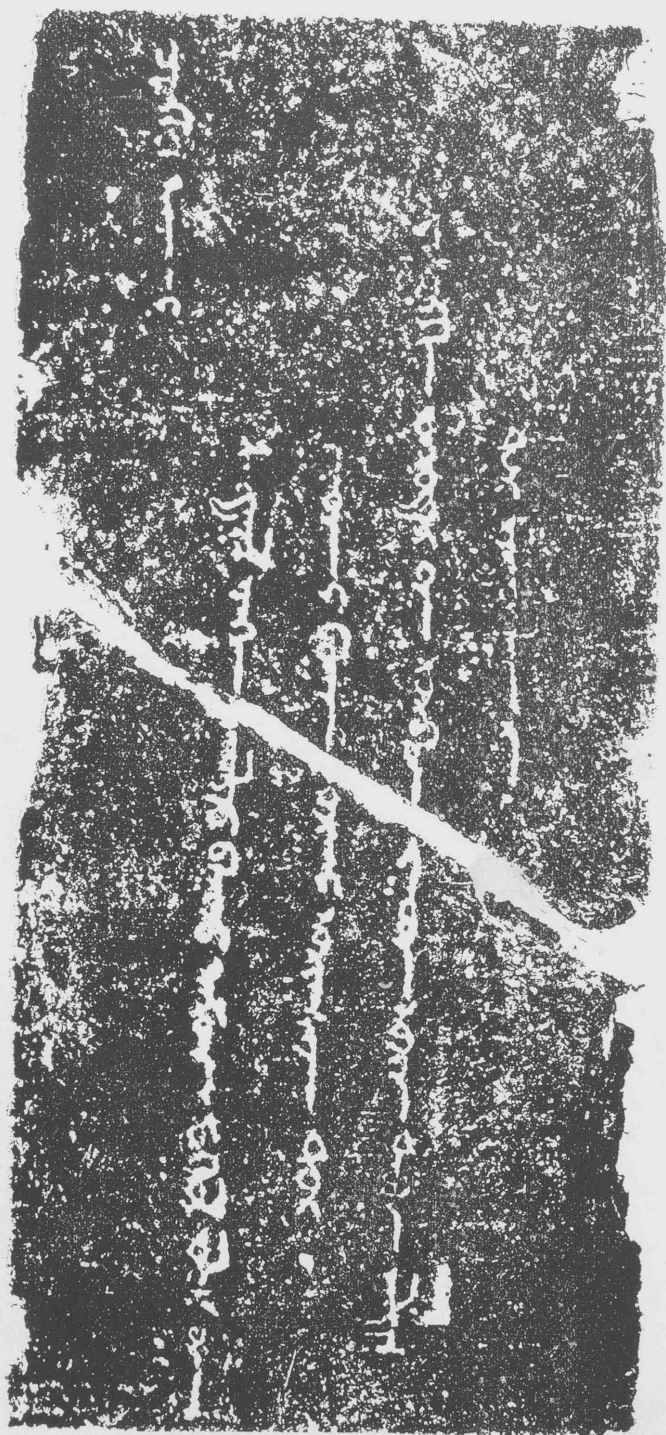
是が所謂「成吉思汗碑石」上の碑銘なのである。

〔附記〕

本稿を草するに當り、羽田先生・梅原先生より貴重なる御教示と資料とを種々頂戴する事を得たのは何よりの幸であつた。附記して以て感謝の意を表はす次第である。

亦バンザロフの所論に關しては、筆者は直接其の論文に當る便宜を持ち得ず、僅にクリューキンの論文を通じて其大略を窺ふに止まる始末であつたが、偶々播磨橋吉氏の邦譯の發表に接し、多大の參考の便宜を蒙つた。併せ記して謝意を述べなければならない。

チンギス・カン 碑文拓本（京大文学部東洋史研究室蔵）



圖版 第三